

令和8年3月

関係者各位

泉の学び舎世田谷区立池尻小学校長

間宮 英二

今年度の改善結果及び次年度に向けた改善方策  
(学校関係者評価委員会からの報告を受けて)

令和8年度重点目標の取り組みに当たり、令和7年度学校関係者評価委員会報告書でご指摘いただいたことを基に、来年度の重点目標について以下のように設定し進めて参ります。

重点目標1

「主体的に考え、協働的に学び合う児童の育成」

- 児童へのアンケートによれば、本校の授業については肯定的なものが多く、探究的な学びに向かう授業の方向性については間違っていなかったと考える。
- 児童アンケート「わたしは自分からあいさつをしている。」の項目の肯定的回答比率は、昨年より10%近くも上昇し81.5%となった。これについては、協働的な授業形態の実施により、学習時間においても児童同士が関わる時間が増加したことも一因であると考え。より一層、協働的な学びの推進を図っていく。

重点目標2

「主体的に運動しようとする児童の育成」

- 児童アンケート「わたしは早寝、早起きをしている。」の項目については、昨年度と同様に肯定的評価が約4割と依然低い回答であった。今年度は、5年生6年生対象に日本体育大学の野井真吾教授の睡眠についての講演を行ったが、来年度以降も継続して睡眠や外遊びの必要性について啓蒙を行っていく必要がある。睡眠を確保するには、十分に体を動かす必要がある。そのため、令和8年度については、月曜日の全校朝会を月に一度とし、他の月曜日を朝遊びとし、外遊びの日常化を図っていく。

重点目標3

「豊かに関わり合い、互いに高め合う児童の育成」

- 児童アンケート「わたしは自分からあいさつをしている。」の肯定的評価は、昨年度と比べ10%近く上昇している。代表委員会の発案である「あいさつ運動」の効果であると考えられることができるが、代表委員会の児童の声からこの運動が始まったというところに意義があると考え。児童の意識が「つながり」に向いてきていることが一番の成果である。しかし、地域アンケートにおいては、否定的回答が多く見られる。どのような場面においても自然とあいさつができるよう、指導のあり方を改善していく。
- 児童アンケート「わたしは相手の思いや考えを真剣に聞いている」「わたしは友達と

協力をしている。」の項目では肯定的な評価が高くなっている。これについては、授業における協働的な学習や普段の生活の中で関わり合いに重点を置き指導を行ってきた成果であると考ええる。

- 児童アンケートの6年生では、昨年度（5年生時）との差異を見ると、「学校生活は楽しい」の項目の肯定的評価が66.6%から79.2%へと大きく上昇している。これは、行事において最高学年として活躍する場が大きく影響していると考えられる。来年度も行事などにおいて最高学年としてのやりがいを感じさせることのできる計画をしていく。また、保護者アンケートにおいても、「学校行事が楽しい」の項目で肯定的評価が93.%と9割を超えている。来年度においても、行事で子どもたちのよさを伸ばしていきたいと考える。
- 児童アンケート「わたしはきまりを守って行動している。」の項目においては、昨年度否定的回答比率が15.9%に対して今年度は21.7%に上昇している。きまりを守るということは、周りの人への意識が重要であると考えられる。この結果から考えると、次年度に向けて、一層周りの人への配慮の気持ちを育んでいく必要を感じる。
- 保護者アンケートにおいては、「お子さんは自分の考えを人に伝えることができる」「インターネットやゲームのルールへの遵守」「自分からあいさつをしている」などにおいて否定的な回答が多く見られた。また、地域アンケート「本校児童は地域の人とあいさつをしている」においても、否定的回答の割合が22.6%の数値となった。これらを踏まえ、他者との関わりについて、来年度さらに力を入れて指導を行っていく必要性を感じた。
- 地域アンケートにおいて、「わからない」という回答が特に多かった項目として、「本校児童にほめようと思ったことがある」「本校児童は地域の人とあいさつをしている」がある。学校関係者評価委員会から地域の方が児童に接する機会の減少が原因ではないかとの指摘をいただいた。情報発信とともに、地域の方の行事への参加協力の発信、学校と地域との連携をさらに推進していく。

※ 今年度は、学び舎についてのアンケート項目を設定しなかった。それについては、学校関係者評価委員会から、検証できる評価体制の構築についてのご意見をいただいた。評価委員会からの進言を受け、課題の改善に向け評価項目の再検討を行っていく。

#### 【まとめとして】

学校関係者評価委員会からの報告を受け、今年度の学校行事をとおして児童の育成をしていくという方向性に間違いはなかったと考える。しかし、今年度の取り組みが全ての児童に当てはまっているわけではなく、修正しなければならない点も多くあることが確認できた。来年度に向けて、児童を真ん中に置き、保護者・地域と連携する体制の再構築に努めていく。